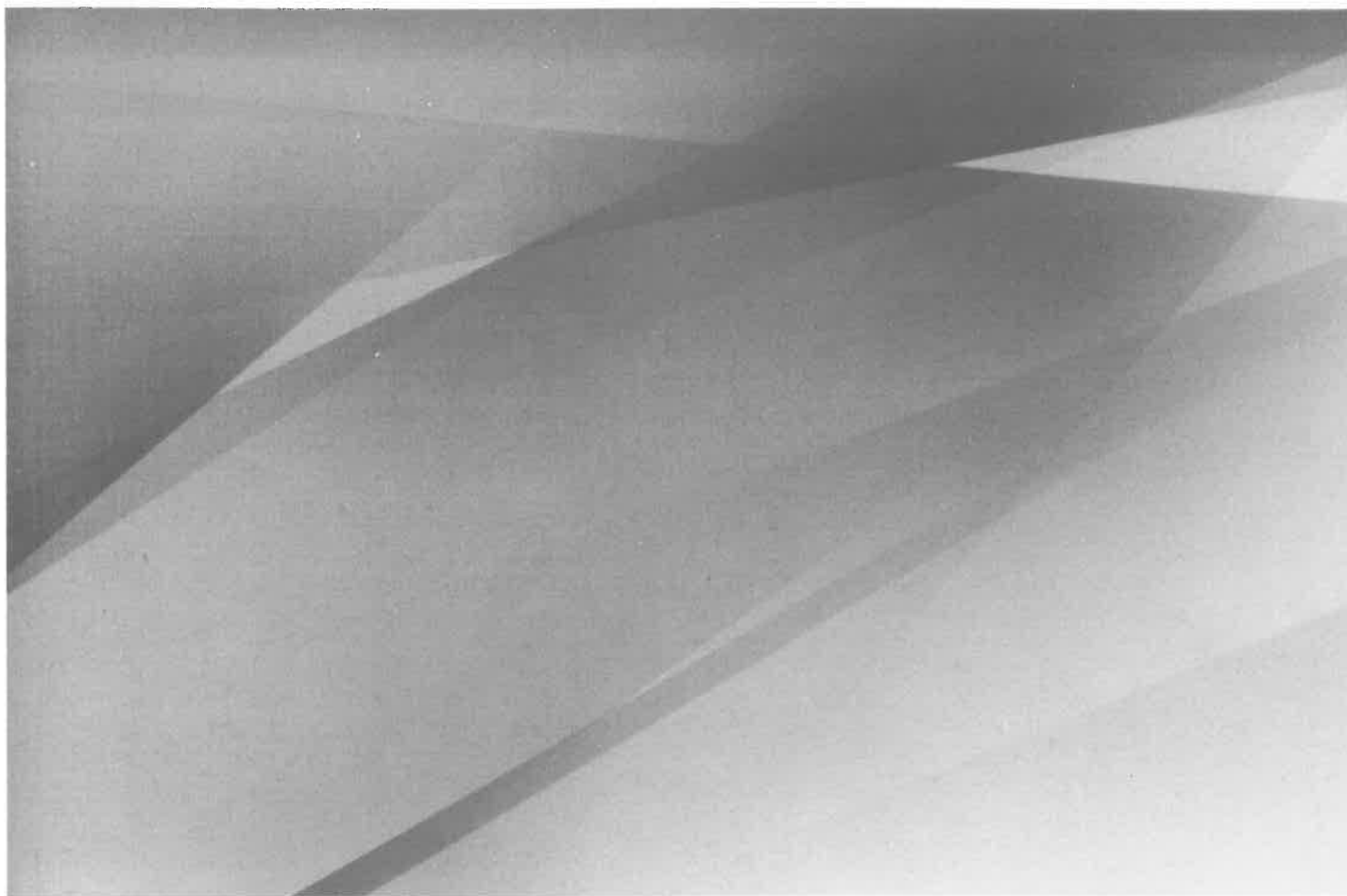


86企画—9 山内盛博 SUKIMA展

12月9日(火)—12月28日(日) (月曜休廊)

GALLERY TAKUMI

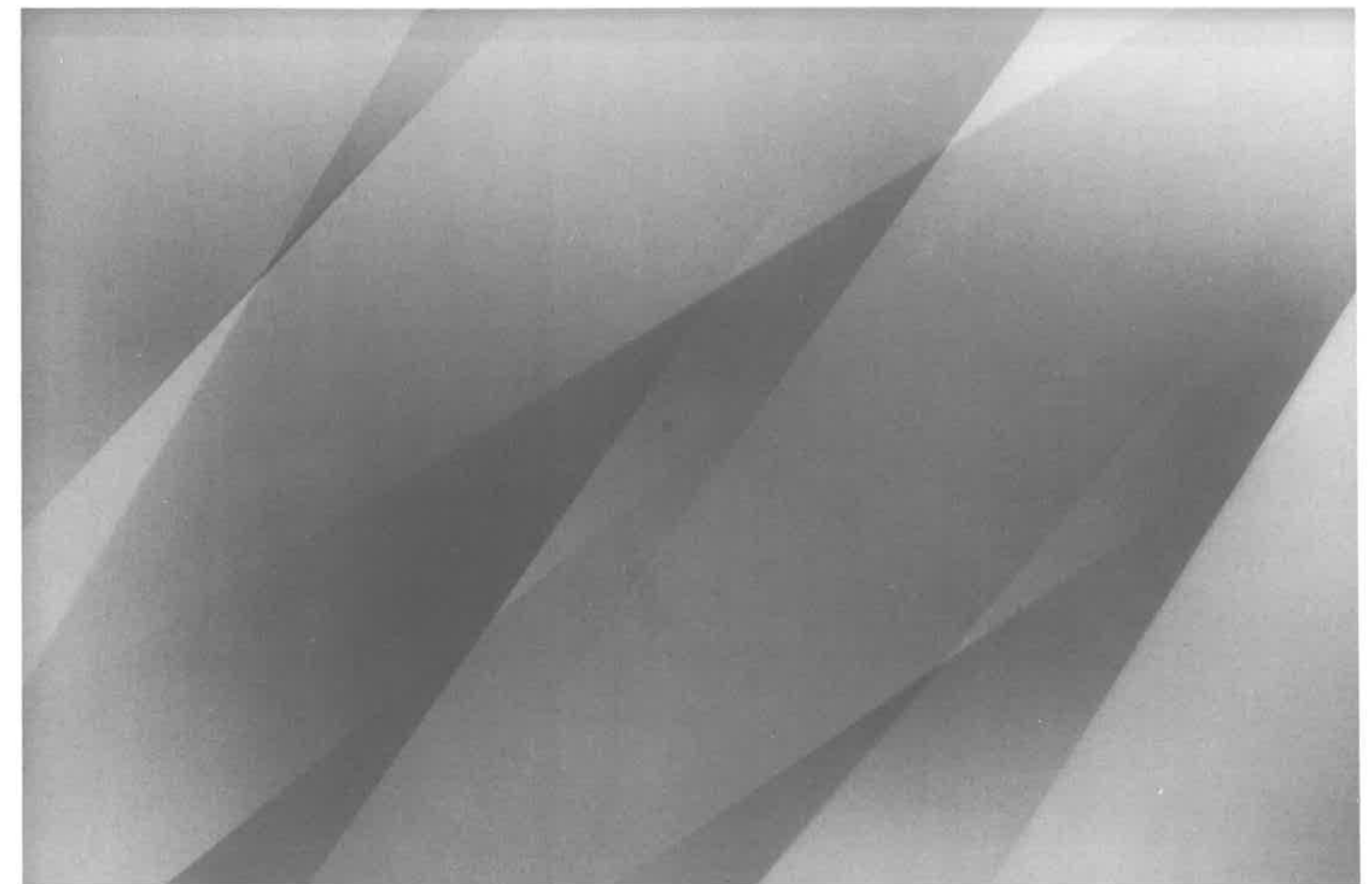


SUKIMA 5 42×62cm 1986



■ 山内 盛博プロフィール

1955年沖縄市に生まれる。79年琉球大学教育学部美術工芸科卒業。沖展、県展に入選、以降毎年出品。80年絵画2人展。スペース水曜展に2回出品。81年個展開催(国吉ギャラリー)。絵画6人展。82年カップコレクションに出品。個展開催(国吉ギャラリー)。第8回欧州美術国際展入選。第9回日仏現代美術展入選。沖縄新象新人8人展。新象展佳作賞受賞。83年物に介在する表面から(4人展)。84年沖展奨励賞受賞。個展開催(沖縄市中央公民館)。絵画の表現方法としての場所と内容展(4人展)。85年沖展奨励賞受賞。県展奨励賞受賞。86年沖展奨励賞受賞。個展開催(沖大市民ギャラリー)。個展開催(space to space、名古屋)



SUKIMA 8 71.5×107.5cm 1986

翁長 直樹

かつて美術作品は作者の様々な思い入れと情念をその作品の中に注ぎ込むことができた。ところが、現代美術においては、とくに反芸術以後、美術作品は、美術自体への批判という形をとることになり、様々な付随するものを切り捨ててきた。それは特にミニマリズムにおける「自己批判としてのモダニズム芸術」に見るように、美術史を自己批判しながら、根源的な美術の構造に迫ろうとするものであった、と言ってよい。

ミニマリズムの問題点は、「芸術の限界を験しているように見えた」点にある。以後、様々な派生を生みだし、オブアート、キネティックアート、概念芸術と、分派し、拡散していった点にある。

80年代に入り、新表現主義やインスタレーションその他、多様なスタイルが、出現してくるが、どれも明確な前代の総括がなされないまま、引用や、「気分」的な拒否や選択によって安易に作品が作られている傾向がある。

山内盛博にとって絵画とは、ミニマル以後を意識しつつ、その成果を平面に限定し、模索する場である。山内は明快で幾何的なフォルムを特質とする現実的な作家であり、デヴュー以来、目まぐるしく自分の作品のスタイルを変えてきた。初期のモノクロに近い色彩で描いた建築物シリーズ、道路などをモチーフにしたズームアップ、そして再度建物によるズームアップシリーズ、シルクの上に三原色で人物を描いた、同上のシリーズ。最後に現在の仕事と連なる「スキマ」シリーズと大きく変貌してきた。初期の場合は、内部構造を意識しつつ外枠を仕立ててあり、きわめて粗雑しくコンセプト性の強いものであった。「スキマ」シリーズにおいて山内は独特なものを確立することになる。それは枠に張ったシルクの上に染め上げるように色を置き、その下のベニヤ板に同様な形をすこしずらして彩色する方法を取ったことだ。

山内は平面における最低条件の支えと、基本的な形と色彩のみで

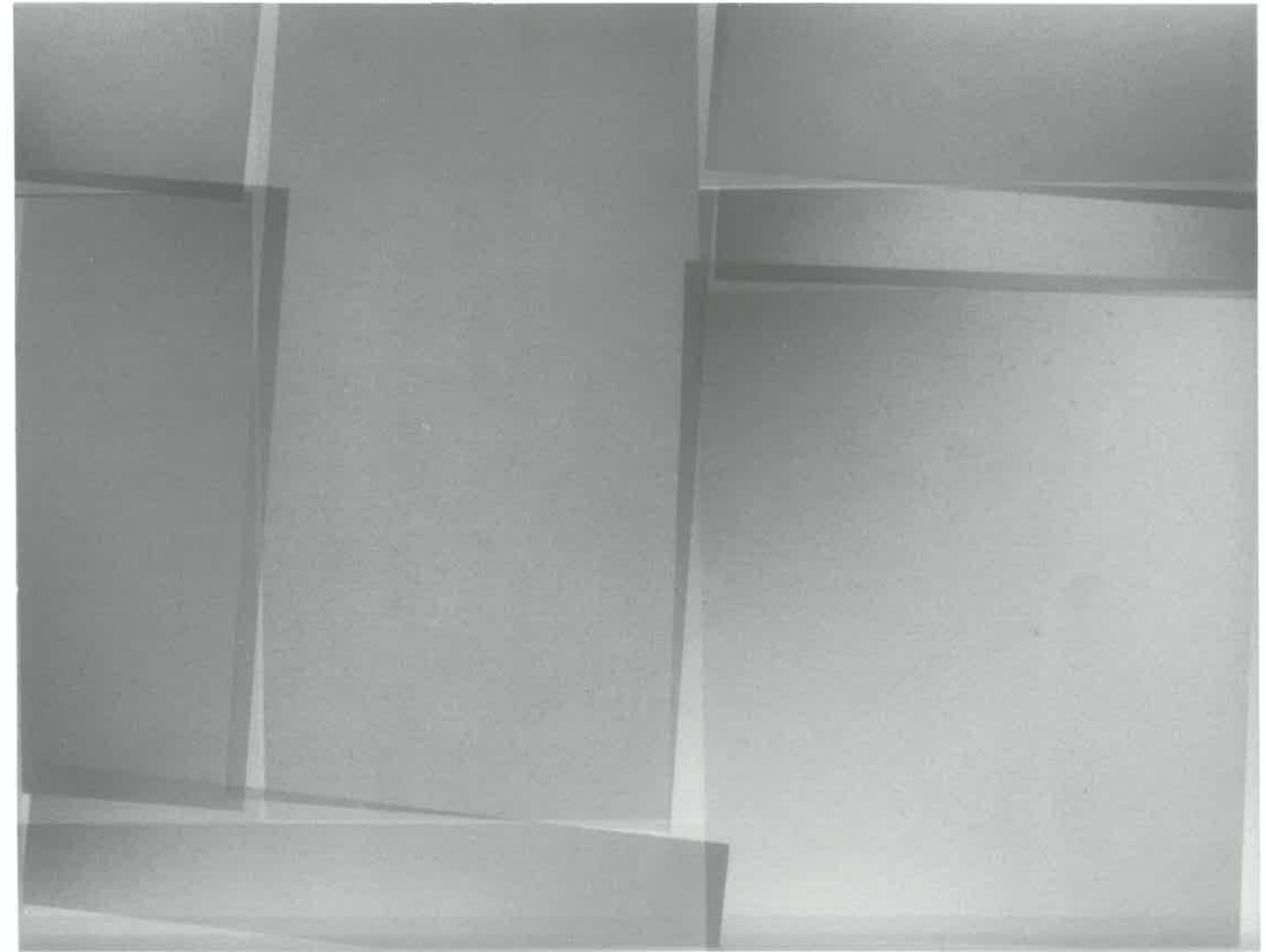
作品を成り立たそうとするが、表面を二重構造にしたために、オプティカルなイリュージョンをも引き出してしまふ。山内の作品プランは、下絵の段階ですでにほとんど決定しており、設計図通り作り上げることが作品の完成となる。それはシステムティックで、発注制作も可能であろう。彩色は、より透明で均一にするため、アクリルガッシュの薄塗りが何度も重ねられる。「描かれたモチーフや形にとらわれたくない」意図で、描かれた形を曖昧にする。

山内は捉われた視線を解放せんとして、絶えず今ある作品を解体し、次のプランに移行する。果しない実験の彷徨が続く。それはある意味で現代美術を志す者の宿命とも言える。美術が再現性を捨て、自らの存立構造をも問うようになって、際限なく素材が拡散し、形式も多様になってきたからでもある。

その中であって、山内は美術の根源を平面に求め、平面の新たな可能性を探ろうとする。近作において、山内の作品は今まで描いていた、鮮やかで、はっきりした四角のかたちから、エアブラシによるグラデーションをかけた、幾何図形の作品と、一本の線とそれに対応する吹きつけられた色面との様々な組み合わせによる作品に変化してきている。それは絵画の成生について問題にしはじめているようにも見える。以前の下絵の段階で決定していた作品のプランが、可変的になり、自在になった。図形は囲いを解かれ、画面全体から解放感がかもし出されるようになったが、その分だけ、きれいになり、コンセプトが見えにくくなった。

ここへ来て、山内は再度、絵画の根源的問題—「描くとは何か」に直面しているようにも見える。限りなく壁に近づきながらも、作品たらしめるには—「Skima」とはある意味で、そのことに思いをめぐらす。モラトリアム期なのかも知れない。それは乗り越えていくべき、存在と非在の「すきま」であるだろうと思える。「物としての表面」を崩そうとしても、根本的な平面(絵画)の問題は、常に山内を突き動かさずにはおかないだろうから。

山内盛博は自己の作品に対する言葉の論理を準備しつつ活動を続ける、決して観念にさらわれることのない現実家である。そのリアリストぶりを今後とも徹底して見せてくれることを期待する。



SUKIMA 4 85×110cm 1986